

子どもの権利と新型コロナ

—国連・子どもの権利委員会：

新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する声明—

長 瀬 正 子

世界的な新型コロナウイルスの感染拡大が進行していた2020年4月8日、国連・子どもの権利委員会は、子どもの権利条約を批准する締約国に向けて声明を出した。世界の子どもの状況を見渡し、コロナ禍で起こる子どもの権利侵害を想定して出されたものである。日本では、2020年3月2日から全国で一斉休校から継続して春休みとなり、再開に向けて動き始めていた時期である。当時は国内の感染が拡大していた時期で、4月22日の時点で国公立私立学校のうち91%が臨時休校の対応をとっていた⁽¹⁾。本稿は、このような歴史的な災禍における国連・子どもの権利委員会の声明を紹介するとともに、それを子どもにも理解できる日本語に表現し直し経過と内容を記録として残そうとするものである。

4月10日、子どもの権利にかかわる国際文書を翻訳して発信している平野裕二が声明を翻訳し、Facebookおよびウェブサイト（<https://w.atwiki.jp/childrights/>）にて公開した⁽²⁾。本稿で紹介する資料（資料2・資料3）は、平野による日本語訳（資料1）をもとにし、随時原文の英語を参考としながら、その内容を読み解き、子どもが理解できる平易な日本語に表現し直したものである。

子どもが理解できる文章にすること、そこにはどのような意味があるだろうか。子育てと絵本をテーマにした福音館書店の雑誌『母の友』に、子どもの周囲にいる大人がふと心に留まった子どもの言葉を集めたコーナーがある。子どものユニークな世界のとらえ方にほっとしたり、考えさせられたりする。そこに、「難しい言葉」というタイトルで5歳の男の子の「ちゃんと分かるようにひらがなで話してよ」という言葉が紹介されていた⁽³⁾。詳しい状況は記されていない。大人の話す内容が、子どもにとっては漢字ばかりで読めない書物のように感じられての発言ではないかと想像する。そして、そのような状況において「(自分にも) ちゃんと分かるよう」な言葉を大人に求めているのではないだろうか。翻って、コロナ禍において、私たちはどれほど子どもに分かるような言葉を発し、ともに考える姿勢を見せているだろうか。

1994年に日本が批准した子どもの権利条約には、子どもを単に保護される存在におかず、ひとりの人として尊重するという理念がある。第12条意見表明・参加の権利は、その理念と原則を具現化したものといえよう。第12条を詳しく解説した一般的意見では、その過程を「子どもと大人相互の尊重にもとづく情報共有と対話を含む、子どもと大人の意見（views）がどのように考慮されて結果を形作るのかを学ぶ、進行中のプロセス（ongoing process）」と定義している。子どもの意見表明・参加の権利を具体的に保障するうえで、情報共有と対話は欠かせない要件なのだ。2020年3月から4月末にかけて、日本と同様に休校措置をとっていた複数の国では、コロナウィルスにかかわる質問や感染防止やその影響についての質問を子どもから受け付け、国のリーダーと感染症の専門家がさまざまな形で応答する会見が実施された⁽⁴⁾。アニメーションを用いたり、子ども記者が説明したり等子どもに親しみやすい表現が用いられていたことが印象的である。これらの国の姿勢からうかがえるのは、感染拡大を防止するため必要な要請をするとともに、それに対する説明と理解を子どもに分かりやすい方法で行うというものである。残念ながら、日本においては、現在までの間にこのような会見は実施されていない。子どもの意見表明・参加の権利の保障は、声明の11番目の項目で明確に示される。「意思決定プロセスにおいて子どもたちの意見が聴かれかつ考慮される機会を提供する」こと、「現在起きていることを理解し、かつパンデミックへの対応の際に行なわれる決定に参加していると感じることができる」ことは、いまだ終息をみない昨今の状況を鑑みても、引き続き重要な指摘である⁽⁵⁾。

では、声明において情報の共有はどのように示されているのであろうか。声明では、10番目の項目で「COVID-19および感染予防法に関する正確な情報を、子どもにやさしく、かつすべての子ども（障害のある子ども、移住者である子どもおよびインターネットへのアクセスが限られている子どもを含む）にとってアクセス可能な言語および形式で普及すること。」と示される。国のリーダーによる説明はなされなかったが、国内ではさまざまな形でコロナウィルスを子どもに分かりやすく説明するとともに感染防止の方法を提示した実践は複数あった。最も迅速だったのは、2月28日の藤田医科大学感染症科の小学校向け資料「コロナウィルスってなんだろう？」である⁽⁶⁾。4月8日には、学校再開に合わせて長野県佐久市と地元の小児科医が作った「新型コロナウイルスげき退作戦！」が作成され、英語版、中国語版、モンゴル語版も同時に作成された⁽⁷⁾。YouTube等による動画での発信も相次いで発信されていた⁽⁸⁾。

ここまで述べたような、声明から読みとれる子どもとともにこの危機を乗り越えようとする理念は、そこには権利条約の基本原則の一つ子どもの意見の尊重（意見を表明し参加できること）にあたる。声明の一つひとつの項目を読み解いていくと、権利条約の条文や一般原則が基盤にあることが分かる⁽⁹⁾。

もうひとつ、声明を貫くのは、一人ひとりの子どもの権利を平等に保障するという理念である。それは、すべての子どもは、「みんな平等に」この条約にある権利をもっているという差

別の禁止の基本原則が土台にある⁽¹⁰⁾。コロナウィルスとその感染拡大によって起きる一連の出来事はすべての人に影響を与える。しかし、その影響には差がある。私たちの社会には、「危機の皺寄せがくる人びと⁽¹¹⁾」とそうでない人とが存在しているのだ。声明には、そのような格差と不平等を視野に入れたうえで、それを意識して是正していく必要性を随所で指摘する。このような危機において、より権利が奪われやすい子どもを例にあげて、重点的に政策が必要であることを訴えているのだ。具体的には、項目7「パンデミックが引き起こす例外的状況によって脆弱性がいっそう高まる子どもたちを保護すること」であり、子どもの学習権に触れた項目3「オンライン学習が、すでに存在する不平等を悪化させ、または生徒・教員間の相互交流に置き換わることがないようにすること」等である。

そのうえで、子どもたちの生命、生存及び発達に対する権利を保障し、維持していくために何が求められるかを指摘している。これは、基本原則の生命、生存及び発達に対する権利にあたる。項目2においては、「子どもたちが休息、余暇、レクリエーションおよび文化的・芸術的活動に対する権利を享受できるようにするための、オルタナティブかつ創造的な解決策を模索すること」のように子どもの遊ぶ権利・休息する権利が示される⁽¹²⁾。そして、項目4では生きる上で欠かせない食について「緊急事態、災害またはロックダウンの期間中、子どもたちに栄養のある食事が提供されるようにするための即時的措置を起動させること」と示される。社会の仕組みを止めないこと（項目5「子どもたちへの、保健ケア、水、衛生および出生登録を含む基礎的サービスの提供を維持すること」）や、子どものまもられる権利に焦点をあてた項目6「子どもの保護のための中核的サービスを必須サービスに位置づけ、これらのサービス（必要な場合の家庭訪問を含む）が機能し続けかつ利用可能とされ続けることを確保するとともに、ロックダウン下で暮らしている子どもたちに対し、専門家による精神保健サービスを提供すること」もある。

以上のことから、声明は、子どもの権利条約という世界共通の基準から現在の危機を見つめた時に、子どもの何が奪われる危険性があり、どのように対応すべきなのか、その基本方針と国が要求されるべき点を述べている。項目1では、その基本姿勢が示され、子どもにとって最も良いこと、最善の利益を目指す原則が基盤となっている。具体的には、「財源の利用可能性に相当の悪影響が生じる可能性があることは認知しながらも、これらの困難は条約実施を阻害するものとみなされるべきではない」ものであり、「子どもの最善の利益の原則を反映したものになることを確保すべき」としている。権利条約は、子どもという存在を包括的にとらえている。一つひとつの権利は断片的ではなく、つながりをもって存在している。そして、社会の影響を大きく受けている。声明は、コロナ禍において見過ごされがちな子どもの存在を浮かび上がらせながら、最も弱い状態にある子どもの権利を保障する視点をもつことですべての子どもの権利保障へとつなぐ。そして、その最善の利益を実現するためのプロセスにおいて子どもの意見聴取を欠かせない要件と位置づけている。

では、声明を読むことは、私たちにとってどのような意味をもつのだろうか。大人にとっては、子どもの権利を直接保障するヒントを学ぶだけではなく、子どもの権利を保障するために必要な仕組みを、国や社会に対して自分たちは要求していいのだと、知ることでもあるといえよう。子どもとともに過ごす大人にとっては、現在、「権利」という言葉は知らなくても、何かしら子どもが生活のなかで我慢をさせられていることや、奪われていることに気づかされる日々である。声明を読むことは、今起きている事態を子どもの権利の視点からとらえなおし、思考することを助けるのではないだろうか。そして、子どもにとっては、声明を読むことで、子ども自身が自分は大切にされる存在で、その大切さには根拠があるのだと知ることができる。たとえ困難な現実を生きているとしても、「本来はどうであるか」という基準を知ることは生きていく力になる、と筆者は考えている。

子どもとすべての大人が、声明を知り、読むことができたらいいいのではないか。筆者は、緊急事態宣言下の5月5日（こどもの日）、中高生から大人が理解できるよう簡単な日本語（（以下、かんたんな日本語訳（資料2））に表現し直した。畠山由佳子（神戸女子短期大学）に声明の背景となる子どもの状況について助言を得ながら、参考資料に掲載する平野による日本語訳をもとにし、随時原文の英語にもあたりながら作業をおこなった。その際には、項目ごとの小見出しを付した。ウェブサイトおよびSNS等で公開したところ、多くの方が読んでくださり、より小さな子どもたちにも説明できるような日本語訳も必要ではないかというご意見もいただいた。当初、筆者は、声明の項目別のデータベースをつくり、国内において活動し続ける団体や関連する提言等をまとめようと考えていた。当時、複数の団体が、子どもの様々な活動を止めないために、悪影響を少なくするために試行錯誤していた。そうした活動や提言の一覧があれば、この危機を乗り越えるための知恵を共有しあうことができると思ったのだ。残念ながら、その試みは実現していない¹³⁾。ただ、そのデータベースの扉絵を友人であるmomoに依頼したところ、声明の項目が意味することを深く表現したイラストが送られてきた。そのイラストに勇気づけられ、もっと小さな子どもにも親しめる絵本のようなものを作ってみることを思いついた。友人との対話から子どもに親しみやすい（child friendly）だけでなく、子ども自身が気持ちを書き込んだり、主体となれるような（child centered）絵本という構想から、デザイナーのmai works の力を借りてワークブック型の絵本を作ることにした。絵本そのものが、子どもの意見表明・参加の権利の要件である情報共有と対話を助けるようなものをイメージした。それが、資料3の小学生くらいの年齢の子どもが声明を理解できるやさしい日本語にしたもの（以下、やさしい日本語訳）である。やさしい日本語訳は、momoによるイラストと呼応した文章となっており、筆者を含む作者の解釈がより盛り込まれたものとなった。9月26日、『子どもの権利と新型コロナ』（国連子どもの権利委員会、平野裕二訳、長瀬正子やさしい日本語訳、いらすとれーしょんmomo、デザインmaiworks）を自費出版にて発刊し、10月30日には第2版を発刊した。2021年1月15日には、第3版を発刊予定である。なお、第3版には

これまでの読者の応答をもとに本文を再検討する等本書全体を見直した⁽¹⁴⁾。売り上げの一部は、コロナ禍でも子どもに必要な支援を止めずに活動する団体へ寄付する予定である⁽¹⁵⁾。

絵本を読んだ方たちから様々な応答をいただく。なかには「権利という言葉はどう子どもに説明しようか悩んだ」というものも少なくない。「子どもの権利」というものが、いまだに非常に耳なじみのない、日常から遠い言葉であることに改めて考えさせられる。他国のように学校教育において子どもの権利を学ぶ機会を保障する必要があるだろう⁽¹⁶⁾。

今後、コロナ禍の子どもたちへの影響も注視し続ける必要がある⁽¹⁷⁾。多岐にわたる子どもへの影響とその手立てを検討する際に、国連声明とそれぞれの訳文を活用していただければと考えている。

〔注〕

- (1) 文部科学省「小中高等学校等の臨時休業の実施状況について（令和2年4月22日時点）」https://www.mext.go.jp/content/20200424-mxt_kouhou01-000006590_1.pdf
- (2) なお、平野による日本語訳は、国連人権高等弁務官事務所（OHCHR）のサイトにも掲載されている。https://tbinternet.ohchr.org/_layouts/15/treatybodyexternal/Download.aspx?symbolno=INT/CRC/STA/9095&Lang=en（アクセス日：2020年11月14日）
- (3) いなぐまとうやくん（5歳）の言葉。選者は詩人の工藤直子さんであり、「こどものひろば」という巻頭のページで繁延あずさんの写真とともに紹介されている。『母の友』第811号，2020年12月，福音館書店，pp.2-3
- (4) デンマークでは3月13日に、カナダでは4月5日に、韓国では4月29日に実施された。いずれもネット記事であるが、下記にアドレスを掲載する。いずれもアクセス日は2020年11月14日である。
「デンマーク首相による、コロナウィルスに関する子供のための『記者会見』」(<https://hyggelig-news.com/2020/03/14/17404/>)，具体的な会見の動画は以下の通り。Mette Frederiksen holdt også pressemøde for børnene: Se det her (<https://www.dr.dk/nyheder/indland/mette-frederiksen-holdt-ogsaa-pressemoeede-boernene-se-det-her>)，Canadian Prime Minister Justin Trudeau answers kids' questions about the coronavirus | CBC Kids News カナダ首相がコロナウィルスについて子どもからの質問に応答する：CBCキッズニュース (<https://www.youtube.com/watch?v=bL3zR0ctykQ&feature=youtu.be&fbclid=IwAR3wbCg2ecDqAEFOMmm8Tnb-GvtMR5Q6OrSJnMbtPJq2UHEUQCE1e1hFcHg>)
Yahooニュース！吉崎エイジーニョ「韓国の子どもたちが『コロナの一番えらい人』に聞いたこと。『コロナはどれくらいちいさいですか？』（2020年5月5日）
(https://news.yahoo.co.jp/byline/yoshizakiejinho/20200505-00176848/?fbclid=IwAR12guhwPOa4-BluOIWDx0CW7nlj_EKyjJyOE6Bzmnvnxwyp7929Ft-1_kDg)
- (5) 本文中の訳文は平野裕二によるものである（資料1）。2020年5月3日に公開されたセーブザチルドレンによる報告書「『子どもの声・気持ちをきかせてください！』2020年春・緊急子どもアンケート結果（全体版報告書）」においても、アンケート結果を踏まえて「1. あらゆる状況にいる子どもたちの意見を聴き、新型コロナウイルス感染症対策などに最大限反映してください」と1番目の提言としている。なお、緊急アンケートは、3月17日～3月31日にかけて、全国各地の小学生から18歳くらいまでの子どもたちを対象に実施され、報告書は961件の回答をもとにしている。
https://www.savechildren.or.jp/jpnem/jpn/pdf/kodomonokoe202005_report.pdf
- (6) 藤田医科大学感染症科・監修小学生（S・S，Z・S）「コロナウィルスってなんだろう？」

- <http://fujiokatano.jp/wp-content/uploads/2020/02/200228primary.pdf>（アクセス日：2020年11月15日）
- (7) 朝日新聞EduA「子ども自身も『コロナげき退!』チラシデータのシェア広がる」(2020年4月3日)
<https://www.asahi.com/eduA/article/13269388>（アクセス日：2020年11月15日）監修を担当した佐久総合病院佐久医療センター小児科坂本昌彦医師は、小児の専門医として、子育てや子どもの不調に悩む保護者の支えになろうと、ネットやSNSを活用して発信を続けている。教えてドクタープロジェクトによる運営サイトはこちら。<https://oshiete-dr.net/>
- (8) 4月19日には、国立成育医療研究センター田中恭子医師監修による動画「しんがたコロナってなんだろう～子供のための新型コロナ予防」(<https://www.youtube.com/watch?v=Y59L9UnKBk0&feature=youtu.be>)「きみだからできること～子供のための新型コロナ予防」(<https://www.youtube.com/watch?v=XDDxKO9nf9Y>)が公開された。ほかには、株式会社ongaqと子供向け玩具「PLAYMOBIL（プレイモービル）」シリーズで有名なドイツ・ゲオブラ・プラントシュテッター社は、新型コロナウイルス感染症の世界的な蔓延をふまえ、日本の子供たちに分かりやすく同ウイルスについて学べる動画を公開している（PLAY MOBIL コロナウイルスってなんだろう <https://youtu.be/PX4R68lvW2Y>）（アクセス日：2020年11月15日）。
- (9) 一般原則は、生命、生存及び発達に対する権利（命を守られ成長できること）、子どもの最善の利益（子どもにとって最もよいこと）、子どもの意見の尊重（意見を表明し参加できること）、差別の禁止（差別のないこと）の4点であり、これに基づき条約は解釈および運用がなされる。
- (10) 日本ユニセフ協会抄訳では、第2条は次のように訳されている。「すべての子どもは、みんな平等にこの条約にある権利をもっています。子どもは、国のちがいや、男か女か、どのようなことばを使うか、どんな宗教を信じているか、どんな意見をもっているか、心やからだに障がいがあるかないか、お金持ちであるかないか、親がどういう人であるか、などによって差別されません。」子どもの権利条約日本ユニセフ協会抄訳 <https://www.unicef.or.jp/kodomo/kenri/syo1-8.html>（アクセス日：2020年11月15日）。
- (11) コロナ禍において注目を集めた論考のひとつ歴史学者藤原辰史による「パンデミックを生きる指針－歴史研究のアプローチ」(B面の岩波新書, <https://www.iwanamishinsho80.com/post/pandemic> 2020年4月2日)における次の一文より引用。「この危機の時代だからこそ、危機の鯨寄せがくる人びとのためにどれほどの対策を練ることができるか、という方々の試金石にはさらなる補足があってもいいだろう」
- (12) 声明の2番目に「休み、遊ぶ権利」(第30条)が示される点も印象的である。4月16日、子ども環境学会は、「新型コロナウイルス感染拡大防止と子どもの心身の健康のバランス」という呼びかけを出している。子どもの心のケアのためのwebサイトでの発信も複数あった。国立成育医療研究センターによる「新型コロナウイルスと子どものストレスについて」(<https://www.ncchd.go.jp/news/2020/20200410.html>)の特集や、精神障がいやこころの不調、発達障がいをかかえた親とその子どもを応援するぶるす・あるはによる「新型コロナウイルス『からだどこころのワークブック』－アルハから大切なあなたへー」(https://kidsinfo.net/?portfolio=aluha_workbook)等があった。
- (13) 筆者は作成できていないが、スコットランドの民間団体である Together (スコットランド子どもの権利連合)では、さまざまな団体が発表してきた声明・提言・報告書等を、国連・子どもの権利委員会が4月8日の声明で行なった11項目の勧告ごとに整理したページも作成している。
Together: Briefings and research
(https://www.togetherscotland.org.uk/about-childrens-rights/coronavirus/briefings-and-research/?fbclid=IwAR2FvPSt3R_OubQZyUxIHizYY15JqRHSfz_U74GjWRJvBrWv719chBQUiaY)
- (14) 初版発行以降、全国各地で購入され、絵本を読んだ子どもたち、大人たちから数々のお声をいただいていた。3版では、より子どもが理解しやすく、そして気持ちや意見を言いやすくするために大幅な変更を行った。具体的には、ワークブックとして書き込みやすいように絵と文章の位置を変更し、よ

り子どもが応答しやすい問いかけ表現に直した。また、「やさしい日本語」が、阪神大震災で日本語を母語としない方に必要な情報が届かなかったという反省の元に生まれた、ユニバーサルデザインとしての表現だということを踏まえ、より多くの人にとってわかりやすい表現を重視し、声明の言葉を再度見直した。

- (15) 2020年12月30日に1回目の寄付を行うことができた。ちいさなとびら「寄付のご報告」
<https://chisanatobira.exblog.jp/240770651/> 2020年12月30日
- (16) ブレイディみかこのエッセイ「誰かの靴を履いてみること」(『ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー』新潮社、2019年)では、イギリスの中学校に通う息子がシティズンシップ・エデュケーションという科目において子どもの権利を学んだエピソードが紹介される。岡本正子・中山あおい・二井仁美・椎名篤子(2019)『イギリスの子ども虐待防止とセーフガーディング——学校と福祉・医療のワーキングトゥギャザー』明石書店では、その背景となるカリキュラムが示されている。
- (17) 例えば、スコットランドでは、スコットランド子ども・若者コミッショナー(CYPCS)事務所が、エジンバラ大学に設けられた「スコットランド子どもの人権研究所」(Observatory of Children's Human Rights Scotland)に委嘱して「スコットランドにおけるCOVID-19対策についての独立子ども影響評価」(Independent Children's Rights Impact Assessment on the Response to Covid-19 in Scotland)を実施した。国連声明を基本的枠組みとし、スコットランドの子どもたちの状況と政府のCOVID-19対策のあり方を分析したものである。平野裕二「スコットランド子ども・若者コミッショナー、新型コロナ対策の影響に関する独自評価の結果を踏まえて「子どもの権利上の緊急事態」を憂慮」(2020年7月19日)
<https://note.com/childrights/n/n939acff5f9cf?fbclid=IwAR2AaKdfK4a3Hu5P6aGbnxJGY7klS0fbJPhK6gXdN9JurfmdicMWmzJgvGo>
今後、日本においてもコロナ禍における子どもたちの影響を検討する際に参考になる取組である。

(ながせ まさこ 社会福祉学科)

2020年11月16日受理

資料1

国連・子どもの権利委員会：新型コロナウイルス感染症（COVID-19）に関する声明

子どもの権利委員会は、COVID-19パンデミックが子どもたちに及ぼす重大な身体的、情緒的および心理的影響について警告するとともに、各国に対し、子どもたちの権利を保護するように求める。

子どもの権利委員会は、COVID-19パンデミックの影響による世界中の子どもたち（とくに、脆弱な状況に置かれている子どもたち）の状況について懸念を表明する。とくに緊急事態および義務的ロックダウンを宣言した国々において、多くの子どもたちが身体的、情緒的および心理的に重大な影響を受けている。

10の人権条約機関が発した宣言に加えて、委員会はさらに、各国に対し、COVID-19パンデミックが突きつける公衆衛生上の脅威に対処するための措置をとるうえで子どもの権利を尊重するよう促すものである。とくに委員会は、各国に対し、以下の措置をとるよう求める。

- 1 今回のパンデミックが子どもの権利に及ぼす健康面、社会面、情緒面、経済面およびレクリエーション面の影響を考慮すること。当初は短期のものとして宣言されたとはいえ、各国の緊急事態宣言および（または）災害宣言がより長期間維持され、人権の享受に対するさらに長期間の制限につながる可能性があることは明らかになっている。委員会は、危機の状況にあっては、公衆衛生を保護するため、一部の人権の享受の制限につながる可能性がある措置が国際人権法において例外的に許容されていることを認識するものである。しかしながら、このような制限は必要な場合のみ課され、比例性を有しており、かつ最小限のものに限られなければならない。加えて、COVID-19パンデミックのために財源の利用可能性に相当の悪影響が生じる可能性があることは認知しながらも、これらの困難は条約実施を阻害するものとみなされるべきではない。このような困難にもかかわらず、各国は、パンデミックへの対応（資源の配分の制約および資源の配分に関する決定を含む）が子どもの最善の利益の原則を反映したものになることを確保するべきである。
- 2 子どもたちが休息、余暇、レクリエーションおよび文化的・芸術的活動に対する権利を享受できるようにするための、オルタナティブかつ創造的な解決策を模索すること。このような解決策には、社会的距離を保つための要領およびその他の衛生基準を尊重する監督下での野外活動（少なくとも1日1回）、ならびに、テレビ、ラジオおよびオンラインにおける子どもにやさしい文化的・芸術的活動が含まれるべきである。
- 3 オンライン学習が、すでに存在する不平等を悪化させ、または生徒・教員間の相互交流に置き換わることがないようにすること。オンライン学習は、教室における学習に代わる創造的な手段ではあるが、テクノロジーもしくはインターネットへのアクセスが限られているも

- しくはまったくない子ども、または親による十分な支援が得られない子どもにとっては、課題を突きつけるものでもある。このような子どもたちが教員による指導および支援を享受できるようにするための、オルタナティブな解決策が利用可能とされるべきである。
- 4 緊急事態、災害またはロックダウンの期間中、子どもたちに栄養のある食事が提供されるようにするための即時的措置を起動させること。学校給食制度を通じてしか栄養のある食事を得られない子どもたちも多いためである。
- 5 子どもたちへの、保健ケア、水、衛生および出生登録を含む基礎的サービスの提供を維持すること。保健制度への圧力の高まりおよび資源の欠乏にもかかわらず、子どもたちは保健ケアへのアクセス（検査および将来開発される可能性があるワクチン、COVID-19関連の治療およびCOVID-19とは関係のない治療、精神保健サービスならびに既存疾患の治療へのアクセスを含む）を否定されるべきではない。子どもたちはまた、緊急事態、災害またはロックダウンの期間中、清潔な水および衛生設備にもアクセスできるべきである。出生登録サービスは停止されるべきではない。
- 6 子どもの保護のための中核的サービスを必須サービスに位置づけ、これらのサービス（必要な場合の家庭訪問を含む）が機能し続けかつ利用可能とされ続けることを確保するとともに、ロックダウン下で暮らしている子どもたちに対し、専門家による精神保健サービスを提供すること。子どもたちは、外出制限により、家庭におけるいっそうの身体的および心理的暴力にさらされ、または過密でありかつ最低限の居住適正条件を欠いた家庭で過ごすことを余儀なくされる可能性がある。障害および行動上の問題がある子どもたちおよびその家族は、密室においてさらなる困難に直面しかねない。各国は、電話およびオンラインによる通報・付託制度ならびにテレビ、ラジオおよびオンライン経路を通じた注意喚起・意識啓発活動を強化するべきである。COVID-19パンデミックの経済的および社会的影響を緩和するための戦略にも、子どもたち（とくに貧困下で暮らしている子どもおよび十分な住居にアクセスできていない子ども）を保護するための具体的措置を含めることが求められる。
- 7 パンデミックが引き起こす例外的状況によって脆弱性がいっそう高まる子どもたちを保護すること。これには、障害のある子ども、貧困下で暮らしている子ども、路上の状況にある子ども、移住者・庇護申請者・難民・国内避難民である子ども、マイノリティおよび先住民の子、HIV／AIDSを含む基礎疾患がある子ども、自由を奪われている子どもまたは警察の留置場、刑事施設、閉鎖養護施設、移住者拘禁施設もしくはキャンプに収容されている子どもならびに施設で暮らしている子どもが含まれる。各国は、COVID-19パンデミックに対処するための措置において差別を受けないすべての子どもの権利を尊重するとともに、脆弱な状況に置かれている子どもたちを保護するための焦点化された措置をとるべきである。
- 8 あらゆる形態の拘禁下に置かれている子どもたちを可能な場合には常に解放するとともに

に、解放することのできない子どもたちに対し、家族との定期的接触を維持するための手段を提供すること。多くの国は、施設で暮らしている子どもまたは自由を奪われている子ども（警察施設、刑事施設、閉鎖施設、移住者拘禁施設もしくはキャンプに収容されている子どもを含む）との面会および接触の機会を制限する措置をとっている。これらの制限は短期的には必要な措置とみなされうるものの、長期に及べば子どもたちに著しい悪影響をもたらすことになる。子どもたちは常に、家族との定期的接触を、直接ではないにせよ電子的通信または電話を通じて維持することを認められるべきである。緊急事態、災害宣言または国の命令による外出制限の期間が延長される場合、このような面会を禁止する措置の再評価を考慮することが求められる。移住の状況下にある子どもたちは拘禁されるべきではなく、また親がいっしょにいる場合には親から引き離されるべきでもない。

- 9 COVID-19に関連する国の指導および指示に違反したことを理由とする子どもの逮捕または拘禁を行なわないようにするとともに、逮捕または拘禁されたいかなる子どもも直ちに家族のもとに帰されるようにすること。
- 10 COVID-19および感染予防法に関する正確な情報を、子どもにやさしく、かつすべての子ども（障害のある子ども、移住者である子どもおよびインターネットへのアクセスが限られている子どもを含む）にとってアクセス可能な言語および形式で普及すること。
- 11 今回のパンデミックに関する意思決定プロセスにおいて子どもたちの意見が聴かれかつ考慮される機会を提供すること。子どもたちは、現在起きていることを理解し、かつパンデミックへの対応の際に行なわれる決定に参加していると感じることができるべきである。

2020年4月8日

◆ 原文：英語（PDF）

◆ 日本語訳：平野裕二

<https://w.atwiki.jp/childrights/pages/327.html>

資料2：かんたんな日本語訳

子どもの権利と新型コロナウイルス感染症

国連子どもの権利委員会 (原文：英語)

日本語訳：平野裕二

かんたんな日本語訳：長瀬正子・畠山由佳子

(2021年 1月15日一部修正)

子どもの権利委員会⁽¹⁾は、コロナウイルスが世界的に流行することで、子どもたちの身体、心や感情表現に大きな影響を与えていると考えています。だからこそ、それぞれの国が、子どもたちの権利をまもるように求めたいと思います。

世界中のすべての子どもたちの状況が心配です。とくに、コロナの前から苦しい状況にいる子どもは、よりつらい状況になっていないか気がかりです。緊急事態宣言が出たり、ロックダウン⁽²⁾がなされている国々においては、多くの子どもたちが身体、心や感情に大きな影響を受けています。

コロナウイルス感染拡大による影響を最も少なくするためにさまざまな対応がなされます。この文書は、どんな時にも、子どもの権利を尊重するために、各国に対して提案するものです。

1. 新型コロナウイルス感染症の世界的流行の影響

今起きている世界中での感染の広がり、子どもの権利のさまざまな面に影響を与えます。健康、社会のありよう、教育、それから、お金に関することやほっとすることや遊びなど楽しいことにも、影響があります。緊急事態宣言による「がまん的生活」は少しの間だけ、と思われていました。でも、実際は少しの間では終わらず、思った以上に長い「がまん的生活」になりそうです。現在は、世界的にも非常に心配な状況です。いつもは、委員会は、誰かの権利をとめるような方法はできるだけやめるべきだと思っています。それでも、今は、人々がこれ以上コロナウイルスに感染しないようにするためには、誰かの権利をとめるようなこともある「がまん的生活」も必要だと考えています。しかし、このような「がまん」は、必要な分だけ、そして、できるだけ少なくする必要があります。加えて、この世界的な感染の広がり、国の財政を苦しくさせます。でも、だからといって、子どもの権利を実現することをじゃましてはいけません。すべての国は、できるだけ感染をへらすための行動を考える際にも、子どもにとって最もよいことは何かを考える(第3条)必要があります。

2. 子どもたちの文化的・芸術的活動を大切に

子どもたちが休んだり、ほっとしたり、遊んだりすること、文化や芸術に触れるような活動ができるようにするために、さまざまな方法を考えましょう。例えば、1日1回の屋外での活動（その時には、人と人との距離をとることや、健康をまもるための基準をまもる）や、テレビやラジオ、それからオンラインを利用した子どもにやさしい文化的・芸術的活動はおすすめです。

3. 子どもの学びを保障すること

オンライン学習が、もうすでにあった不平等や格差をより悪化させないようにすることも大切です。また、オンライン学習だけが、子どもと教員のコミュニケーションをとるものになることもさげましょう。オンライン学習をするための環境を考えてみましょう。家にパソコンがありすぐにオンライン学習ができる環境がある子どもは学習に参加できますが、そういった機器をもっていない子どもは参加できません。そうした状況にある子どもがいることも想像し、子どもと教員が交流するためのツールをオンライン学習のみにすることなく、子どもが活用できる多様な方法を考える必要があります。

4. 栄養のある食事を確保すること

緊急事態、またはロックダウンの間に、子どもたちが栄養のある食事をたべることができるようにするための仕組みをすぐに準備しましょう。学校が休校になっていますが、栄養のある食事が給食だけであるという子どもたちもいるからです。

5. 子どもに対する基本的なサービスをとめないこと

子どもに対する基本的なサービス（例えば、健康に関すること、水、衛生状態をよくすることや出生登録など）をとめないようにしましょう。子どもの健康を守るシステムは、この間の感染にかかわる対応によって忙しくなったり、もともとあった資源が少なくなってしまうたりしています。たとえ、そのような状況であっても、子どもたちが必要とする健康にかかわるケアがうけられなくなったり、受けづらくなってしまうのを防がなくてはなりません。例えば、コロナウイルスに関する治療については必要な検査、将来開発される可能性のあるワクチンを受けることがあげられます。コロナウイルスに関わる医療ケアだけではありません。医療サービスが足りない状況になっても、子どもたちがもともと持っていた病気に対する治療やメンタルヘルス（心の健康）に対する治療も引き続き受けられるようにする必要があります。

どんな緊急事態においても、清潔な水が飲め、清潔な環境にいられるようにすることは大切です。出生登録についても同様です。

6. 子どもをまもる仕組みを保ちつづけること

子どもをまもる仕組みを、今の状況において「非常時でも絶対に提供されるサービス（英語では、essential services）」として考える必要があります。それは、食料を売ったり、電車やバスを動かしたりすることや、医療や警察と同じように止めてはいけないサービスです。そして、これらのサービスが、子どもと家族にとって使いやすい仕組みであり続けるようにしましょう。子どもや家庭にとって必要だと思われるときに家庭訪問してもらうことや、心の安定をまもる（メンタルヘルス）ためのケアを提供することなどが考えられます。外出制限があることは、子どもたちが、家のなかで体や心への暴力にあうリスクを高めてしまいます。また、ものすごく家族がたくさんいてきゅうくつなスペースで生活している子どももいます。そうしたとき、特に、障害のある子どもとその保護者は、よりしんどい状況になってしまうこともあります。すべての国は、電話やオンラインによる連絡や通報の仕組みを知ってもらうために、今まで以上にテレビやラジオやオンラインを通じて働きかけていく必要があります。そして、コロナウィルスの感染拡大によってもたらされる経済的な、あるいは社会的な影響をできるだけやわらげるためにも、貧困、あるいは住宅事情がよくない子どもの権利をまもるための特別な対策も求められています。

7. よりつらい状況になってしまう子どもに重点をおく

感染の世界的な広がりによって引き起こされる想像をこえた状況によって、よりつらい状況になってしまう子どもの権利をまもりましょう。具体的には、障害のある子ども、貧困の状態にある子ども、路上で生活している子ども、移住や難民の申請をしている子ども、国内で避難をしている子ども、マイノリティや先住民族の子ども、HIVを含む基礎疾患を持っている子ども、自由を奪われている子ども、難民キャンプや少年司法にかかわる施設、児童養護施設等の子どもが考えられます。コロナによる影響を最も少なくするためにも、差別の禁止（第2条）の視点は大切です。私たちは、コロナによる影響でよりつらい状況になってしまう子どもに重点を置いた対応をとる必要があります。

8. 自由を奪われている子どもたち

自由を奪われている子どもたち（身体的に行動が制限されている施設などで生活している子どもたち）について特に伝えたいことがあります。可能ならば、子どもたちが施設から釈放されるようにしましょう。それが難しい場合は、家族と定期的に会えるようにする方法を考えましょう。多くの国では、施設で生活する子どもや自由を奪われている子ども（例えば、警察の施設や刑事施設、閉鎖されている施設、難民のひとたちを収容する施設など）は家族との面会を制限されています。こうしたことは、短期間は必要な場合があるものの、長期間になると、よくないことが多くなります。子どもたちは、家族に直接会うという方法が難しくとも、電子

メールや電話等も含めて家族と連絡がとれるようにするべきだと考えます。緊急事態宣言が延長される場合は、家族と会うことを禁止するということについても一度考えなおしましょう。親と一緒に移住しようとしてきた子どもたちが収監されたり、親と引き離されてはいけません。

9. コロナウィルスにかかわる子どもの逮捕

コロナウィルスに関連する国からの指導にしたがわなかったことによって、子どもが逮捕されたり、刑務所に入ることがないようにしましょう。また、たとえそうした状況が起きたとしても、すぐに家族のもとに帰れるようにしましょう。

10. コロナウィルスに関する正しい情報の伝達

コロナウィルスについて、そして、コロナウィルスの感染を予防していくための正しい情報を、子どもにやさしくかつすべての子どもに伝えられるようにしましょう。そのときには、障害のある子どもや、日本語を理解するのが難しい子どもや、インターネットにアクセスしにくい子どものことも想像し、さまざまな言語や方法で可能な限り届けられるようにすることが大切です。

11. 子どもの意見を聴くこと

今起きている世界的な感染の広がりにおけるさまざまなことを決めていくプロセスにおいて、子どもたちの意見が聴かれ、大切にされる機会をつくりだしていきましょう。子どもたちは、今何が起きているのかを理解し、そして、そのことにかかわってなされるさまざまな対応とプロセスにおいて、自分も参加している、かかわっているという感覚をもてるようにすることが何よりも大切なことです。

2020年4月8日

〔注〕

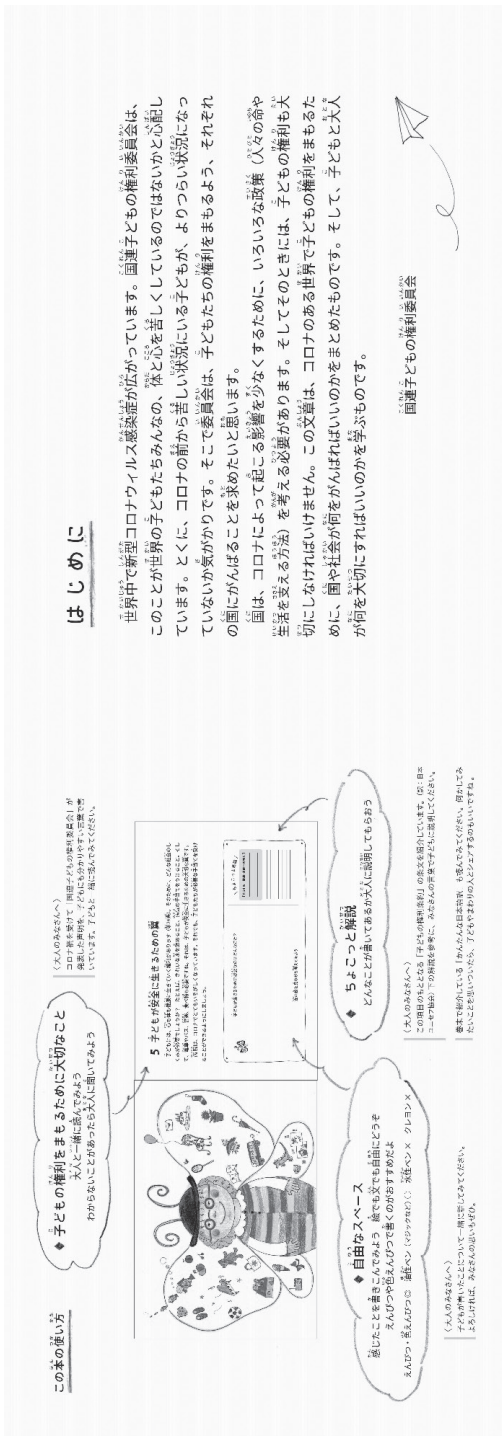
- (1) 子どもの権利についてそれぞれの国の状況をチェックしたり、確認したりする国連の組織です。
- (2) 感染が広がるのを防ぐために人々の移動を少なくするための政策

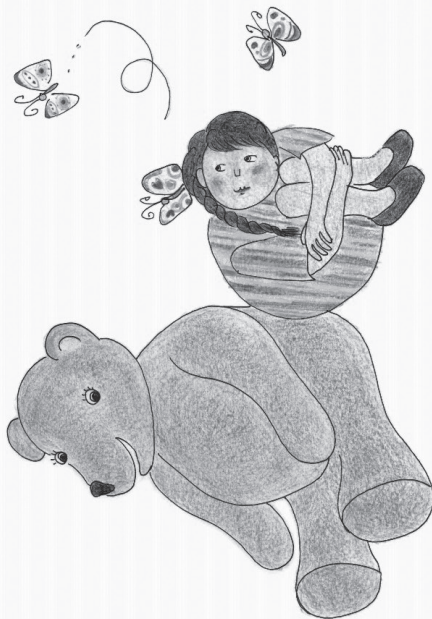
〔英語全文〕

https://tbinternet.ohchr.org/Treaties/CRC/Shared%20Documents/1_Global/INT_CRC_STA_9095_E.pdf

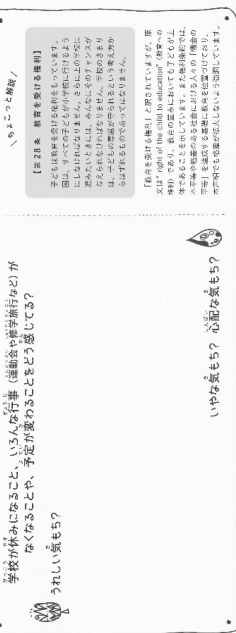
平野裕二さんによる日本語訳全文

<https://img.atwikiimg.com/www26.atwiki.jp/childrights/attach/327/36/CRC%20Committee%20on%20COVID19%20Japanese.pdf>

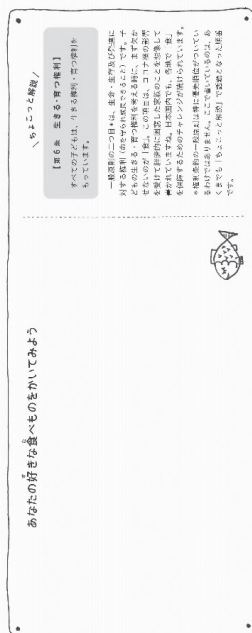




字ひをとめないため、オンラインの学習が伸びています。でもね、すべてをそれにたよってはいけません。その方法では参加できない子どももいます。大事なのは、子どものさまざまな状況を理解すること。そして、子どもとやりとりをしながら、子どもにとってよい方法を考えることです。



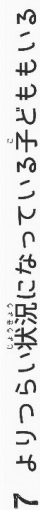
子どもは、**卒業**のあるおしいごはんを食べて、**元気に育つ時間**があります（第6条）。毎日「**あー**おいしかった！」と、お父さんと心をいっしょにする**時間**が必要です。それは、**コロナの間も**変わまりません。結局だけが「**おいしくて卒業のあるごはん**」を食べる**時間**になっている子どももいます。大人は、**学校が長く休み**になっても、**子どもが卒業のあるごはんを食べることが**できるようにしましょう。



A whimsical illustration of a butterfly with a human-like face, wearing a hat and glasses. The butterfly's wings are large and rounded, filled with various small, detailed drawings of everyday objects and animals. The body is striped, and the antennae are long and curly.

左の絵を見ながら考えてみよう

A black and white illustration of three children holding a large, circular umbrella. The umbrella is decorated with various whimsical patterns and symbols, including a sun, a cat, a house, a rainbow, and stars. The children are smiling and looking up at the umbrella.



コロナはすべての人の生活を変えます。だがそれぞれに差があって、生活が大きく変わる人、あまり変わらない人がいます。コロナの前から苦しんでいる子どもは、よりつらい状況になっていきます。すべての子どもは、みんな平等に権利をもっています（第2条）。大人は、よりつらい状況になっている子どもを、とくに大切にしましょう。そして、このような差をつくらないように、社会のしくみをこのえていきましょう。

あなたのまわりで、こまっている人はいるか？

/ちよこつと解説/

【第2章 差別の禁止】

すべての子どもは、みんな平等にこの条約にある権利をもっている。子どもは、国がいがい、男か女か、どんな年齢か、どんな意見をもっているか、心やからだに障がいがあるかどうか、お金持ちか貧乏か、誰がどいう人であるか、などによって差別されず、ま

せん。

徳利律約の一般原則の三つ目に、差別的禁止があります。社会の仕度みは、すべての子どもを人別にするものにはなっていません。コロノは、社会の必要が十分でない子どもをより善いのでしてします。本区画では、どのような状況にある子どもたちが影響を受けやすいかを説明しています。



8 自由じゆうをううばばわわれれてていいるる子こどもどもたち

自由というはわれている子どももいます。警察官の説教など、行動に決まりがある（自由を出かけることができない）施設で生活する子どもたちです。できるだけ、子どもたちが施設から出ることができるようになります。また、コ罗纳がはじつて、感染をへるために家族と会えなくなった子どもにも、子どもたちが、家族と会ったり、手紙を出したり、電話やメールをしたりできるようにします。子どもたちも、子どもが家族とつながりをもつ権利は大切ですよ（第9期）。

もし、コロナがおさまって自由じゆうになったら、やってみたいことはあるかな？

/ ちよこつと解説 /

【第9条 親と引き離されない権利】
子どもでは、親と引き離されたい権利があります。子どもにもっとよいという理由から引き離されることも認められますが、その場合は、親と会ったり連絡したりすることができずす。

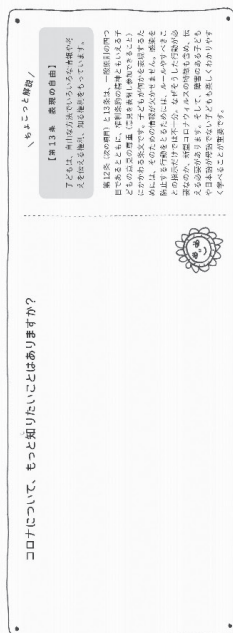
この項目は、新編された法説（憲法解説、判例集）のなかに、既出事項、時と場合を異ならせ、コメントなどのなすべく、その旨を説明する目的で書かれています。人、あつては家族との交渉についても動機とされています。裁判例では、例9以外にもすくなくとも、裁判官が一層にしていることが、できるような努力を田や畑が、あるが、そのように求めています（第8巻、第10巻）。この点の裏面を補正する仕組みを認めることは、可なり大切な仕事です。



でも、今の日本では、コロナのことを理由に子どもを逮捕することはありません。どうか心配しないでください。



そのときには、一人ひとりの子^こどもに^にあ^あわ^わせて、その子^こがわ^わかるように説明^{しやうめい}することが、なにより大切^{たいせつ}です。お花^{はな}が犬^{いぬ}とおは^はな^なしする^{する}ように、木^きがう^うざ^ざと語^ごりあ^あう^うに、大人^{おとな}が子^こどもの「わ^わかる」を、そ^そと助^{すけ}ける^{ける}ことができ^{でき}ます^{ます}ように。





11 どんなときも子どもの「声」を聴く

子どもには、意見を言う権利があります (第12条)。コロナについても言いたいことはいろいろありますよね。大人は、コロナにかかわることを決めていくときも、子どもの意見を聴きましょう。いま何が起きているのか、子どもがわかること、そして、自分も参加していると感えることが大切です。大人は、子どものペースを大切に、カメさんのようによりそっていききたいものです。

これからコロナの日々はしばらくつづいていくかもしれません。
あなたはどんな気もちかな? 言いたいことを書いてみよう

／ちよこつと熊さん／

【第12条 意見を言う権利】
子どもは、自分の意見をもつて口を開き、意見を言う権利を持っています。その権利は、子どもの年齢に応じて、じょうぶに行使されなければなりません。

熊さんは、子どもを保護する責任にのまわり、子どもの意見を尊重しています。コロナ禍にあって、子どもはどんな気持ちでいるのでしょうか。大人も子どもと一緒に考えてみることで、子どもと一緒に生きていけるかもしれません。でも、大人だけで決めないでほしいのです。

